

第4章 インタビュー場面における相互行為分析

ある高齢女性に対するビデオ分析結果から

3班

(中本, 西寄, 西下)

0. はじめに

・調査概要

2002年9月23日から25日にかけて、A県南部に位置する伊勢町(仮名)において調査合宿を行った。私たちの班では、23日に、伊勢町に在住の高齢女性、Zさん宅へ行き、Zさんに対し、日常生活等についてのインタビューを1時間ほど試みた。その際、ビデオカメラ1台を設置しての撮影と、音声録音をさせて頂いた。インタビューにおける配置図とカメラ撮影範囲については、次ページの図1及び画像データ1を参照して頂きたい。

Zさんは、91歳になる高齢者であるにもかかわらず一人で生活しており、家事、炊事を自らが全て行っている。伊勢町では地域ボランティア福祉活動支援情報通信システム¹の運用を施行しているが、Zさんは「被ボランティア」として伊勢町役場の福祉情報システムに登録している。そこで、伊勢町役場の方々からZさんを紹介して頂くことになった。Zさんは今のところボランティアを依頼する必要はない²と話していた。

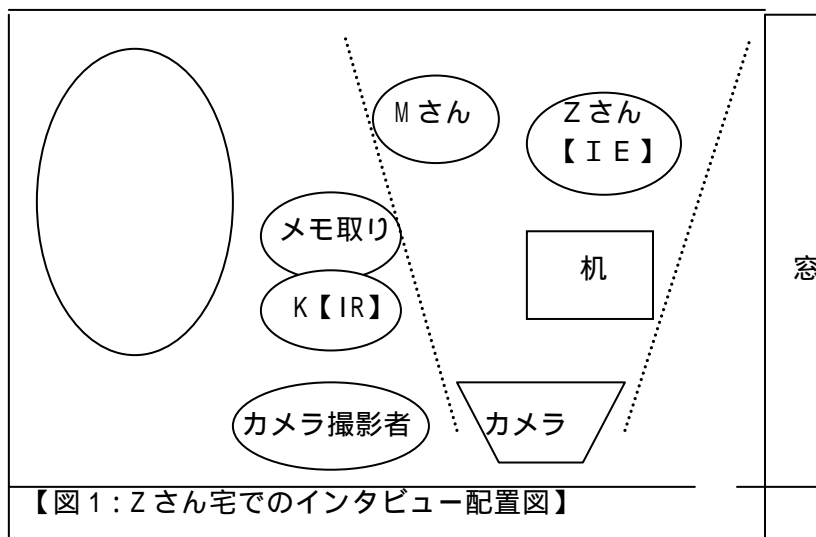
また、学生でありインタビューアー³でもあるK、伊勢町役場でボランティア情報システムの運用に携わっているMさん、このほか、学生であるカメラ撮影担当やメモ取り担当など、6名が参加した。合計9名である。

MさんはZさん宅を何度か訪れたことがあり、顔見知りである。今回のインタビューでは、高齢であるZさんが多数の学生に囲まれることにMさんが不安を感じたために同席することになった。

¹ このシステムは、平成13年2月から平成15年3月にわたり「A県伊勢町福祉支援情報通信システムの開発・展開事業」として実施された。活動の目的は、ボランティア・自治体間での情報共有と要介護者・要援助者からの要望をボランティアに円滑に依頼することが可能な地域ボランティア福祉システムを開発・運用し、その問題点を明らかにすることである。

² この伊勢町における福祉支援情報通信システムにおいてボランティア対象(被ボランティア)となるのは、介護保険制度による要介護認定を受けていない、比較的健康的な人に限られている。介護保険制度によるサービスの提供を減らさないようにするためであり、また、要介護認定を受けている人の介護は専門的な知識や技術を必要とするため、ボランティアでは対応できないからである。したがって、伊勢町での福祉情報システムに登録する人の中に今のところボランティアを依頼する必要がない人がいても不思議ではない。

³ インタビューする者をインタビューアー(IR)、インタビューされる者をインタビューイ(IE)と呼ぶ(ここでのインタビュー場面におけるIRはKであり、IEはZさんである)。



【画像データ1：カメラ撮影範囲（図1での点線部分）】

1. 注目部分

「通常、インタビューはインタビューする者（IR）と受ける者（IE）の会話からなる。基本的には両者の質問 応答のシークエンスから構成される。」（好井 裕明[1999:41]）しかし、今回のインタビューは二者間での{IR-IE}形式だけで形成されているのではなく、それ以外のMやその他の学生の参与により構成されているが、特にトラブルもなく終了した。このような場面において、特にMの参与の仕方に注目し、Mは自身をどのようにカテゴリー化し、どのような配慮をしながら振舞っているのだろうか。また、Mがインタビューに参加することでどのような機能を果たしているのか。これらを、会話分析を通じて解明していこうと思う。

2. K-Zによる{IR-IE}関係とM

2-1 KとZのフォローをするM

まず、以下の会話を見て欲しい。断片1はIRであるKが、IEであるZに『日常生活での楽しみや生きがい』を聞いている場面である。このときのK-Z関係、Mの振る舞いを

見てみたいと思う。

【断片 1】PM2:04:37~ (トランスクリプト 183 ページ 79~89 部分)

- 01 K: えっとーあーのー日常のこう生活でこう楽しいこととかこう、生きがいみたいな
のってありますか？
- 02 Z: どう言ったら良いんでしょうか (笑い) ほんなもう希望もないし、望みもない
し (笑い) もー死を待つだけ (笑い)
- 03 K: (笑い)
- 04 M: (笑い)
- 05 Z: もー死を待つだけ (笑い)
- 06 K: いやいや
- 07 M: 今日はきっと楽しいな
- 08 Z: ほうですねみなさんがおいでいただいたからねー
- 09 K: あ、そうですかーありがとうございます

ここではKの問い(1行目)に対してZが答える(2行目)のだが、回答前に前置きがあり、次の発話を選好されていない(dispreferred organization)ものとしてマークされている。ここで会話における選好/非選好(優先的構造/非優先的構造)について説明する。ポメラッツの用語法を山田富秋が要約したところによれば、「会話シーケンス中の同意や賛成をつくりだす隣接対の現象が選好される優先的; preference organization)

会話で、会話シーケンス中に展開する沈黙や言い訳なども含んだ隣接対の第2部分(= 応答部分)の組織化のことを、選好されない(非優先的; dispreferred organization)組織化と呼んでいる。」。(山田[1999:28-31])つまり、ここではZはすぐに回答せずに「どう言ったら良いんでしょうかh h h h」とためらっている。その上、「希望もないし、望みもない」というように、生きがいに対してネガティブな意見である。ネガティブ発言に対して否定するのは自然に起こりうる行為として捉えられる。よって、この一連の流れは優先的構造になり終了しているように見える。ところが、この後にMが「今日はきっと楽しいな」とZに対して付加的に問う。これはどういう効果があるのだろうか。またK-Z関係にどのような影響を与えているのだろうか。

7行目の「今日はきっと楽しいな」という発話は1行目のKの質問を付加的にあつかうことで8行目からも分かるようにZの回答を引き出している。そしてそのことをZは「ほうですね~」と肯定しており、KもまたMの発言に対して「あ、そうですか~」とコメントしている。つまりMの発言をK・Zともに承認している。また通常の会話であれば隣接対にコメントをつけた6行目のKの発言で終了しても不自然ではないが、今回は答えの部分がネガティブなものであり、6行目のKの発言で終了するのは多少違和感がある。そこで7行目のMの発言がKのフォローになっている。また、前述したように、Zの答えも引き出している。つまり、IRでもIEでもないMの発言がIEの答えを引き出す補助的役割を果たしていると同時にIRもフォローし、K-Zの{IR-IE}関係を維持していると思われる。

2-2 Mによる会話の先取り

次に断片2(1~3行目の矢印部分)の会話を見て欲しい。ここは、IRであるKがIEであるZへ『本日の体調について』の話題をもちかけた部分である。このときのK-Z関係とMの振る舞いをみてみたいと思う。

【断片 2】PM2:01:29~ (トランスクリプト 181 ページ 11~19 部分)

問」 - 「答え」という隣接対⁴になっている。その後Kによるコメント（3行目）がつづく。この「質問」 - 「回答」のあとにつづく「コメント」は隣接対に対応する発話であり、インタビュー場面のほか、教室での授業場面においてもみられる。1～3行目は【K = 「質問」 Z = 「回答」 K = 「コメント」】というシークエンスから成り立っているが、このK-Z間でのやりとり中のMの視線に注目してみると（視線付きトランスクリプト矢印部分参照）Kが1行目において話し始めたときにはKに対し視線を向けているが、「体調とかはいかかですか」という質問を最後まで話し終えるうちに、Zの方へ視線を向ける。このMの視線の動きにはどのような意味があるのだろうか。

「会話には次に誰が話すのかを決め、発話の順番をうまく配分する規則がはたらいっているはずである。その規則は、今の話し（手）を聞いている人が、その発話がどこで終わる可能性があるのか、つまり発話の潜在的完結点⁵の予測を可能にする規則でなければならない。しかも、会話に参加している人は互いに発話の順番の交代を何らかの形で予測し、相互に調整することができる」（山田[1999:4]）と山田が言うように、Mは、Kが話し始めた時点でKの話す内容をZに対する「質問」と理解し、それならば次に話されるべきものはZによる「答え」と予測することができた。そのために、次の話者（Z）を先取りした形で、Kの質問途中にもかかわらず、視線をZに移すことができたと考えられる。

これらから、Mの視線の動きに注目してみると、Mは自らを「聞き手」とカテゴリー化し、KとZに対し、「聞き手性の表示」をしていることが分かる。それと同時に、Kを「IR」、Zを「IE」としてカテゴリー化していることも分かるだろう。Zに注目してみても、Kが最後まで話し終えるうちに、Kの質問終わり部分とオーバーラップして既に答え始めている。これは、ZもMと同様、Kの1行目の発話を、自分に対する「質問」だと予測することができ、自らを「答える者」とカテゴリー化し、答えるべきだと認識したためであろう。また、Mの、自分（Z）に向けられた視線によってZは、答えを話すべきだと促された可能性もある。

2-3 分かったこと

断片1、2では、Mの発話や視線に注目することで、Mが自分やK、Zをどのようにカテゴリー化しているのか、またそうすることで、どのように振舞っているのかを見てみた。断片1では、Zの答えがネガティブなものであったために、自らが発言することでIRであるKに対し配慮している、また、その他、周囲の空気を崩すことがないように振舞っているようにも見えた。これは、IRでもIEでもない立場であるがゆえにできる。また、断片2においては、K-Z間の「IR」 - 「IE」関係を意識することで、発話権をもっている方へと視線を向けなおしていた。その際、今、話されている発話がすべて終わるまでに次の話者を予測し、視線を先取りしていることが分かった。

以上のように、ここでのMの発言や視線をみると、KとZによる「IR」 - 「IE」関係を意識し、自らをIRでもIEでもない立場（IRとIEの補助的役割、聞き手）とカテゴリー化しつつ振舞うことで、KとZによる「IR」 - 「IE」関係を崩さないままインタビュ

⁴ 「質問と応答」「呼びかけと応答」「挨拶と挨拶」などの2つ一組の対として類型化された発話類型のことをシェグロフやサックスは「隣接対」と呼んでいる。

⁵ 潜在的完結点（possible-completion-point）とは、今の話し手がどこで話を終えるかは何らかの仕方で聞き手に予期されること、そして話し手も例えば「どうして」を順番の最初にもっていくことで、これから何らかの質問をつくりだす可能性を投企することができ、こうして今の話し手から次の話し手へ移行するポイントのことをいう。

一のやり取りをうまく成立させる働きがあることが分かった。

3 . Kの補助としてのM

3 - 1 お助け船

つづいて再び断片2を見てもらいたい。2節では1～3行目でのKとZ間でのやりとりにおけるMの視線に注目してみたが、以下では、その後につづくMの発言に注目してみたいと思う。

【断片2】PM2:01:29~(トランスクリプト181ページ11~19部分)

- 01 K : あの今日は体調とかはいいですか? 質問
- 02 Z : ええ、もう普通です 回答
- 03 K : 普通あ、元気で。あ、はいよかったです コメント
- 04 M : 食欲もあったっけ? 質問
- 05 Z : はい 回答
- 06 M : 朝からようけ食べた? 質問
- 07 Z : もういつもの通り 回答
- 08 M : ほんま
- 09 Z : はい
- 10 K : あ、そうですか、あーよかったです コメント
-
- The diagram shows the flow of conversation between K, Z, and M. Arrows indicate the direction of speech: K to Z (01), Z to K (02), K to Z (03), M to Z (04), Z to M (05), M to Z (06), Z to M (07), and K to Z (10). The labels '質問' (Question), '回答' (Answer), and 'コメント' (Comment) are placed in boxes next to the corresponding lines of dialogue.

1、2行目ではKが「質問」し、それに対しZが「回答」している。(「質問」 - 「回答」という隣接対を構成)その後、3行目においてZの回答に対しKが「コメント」をする。この時点でKとZによる{IR - IE}のカテゴリー対は有効(レリヴァント)になっているのだが、この直後に発言されたのはKでもZでもないMによるものである。そしてその後、MがZに質問し、それに対しZが回答するという一連の流れ(4~7行目 MとZの「質問」 - 「回答」という形で挿入)がある。ここでなぜMは発話することが可能になったのか。また、そのときのKとZはこの発言をどのように認識しているのだろうか。

インタビューでのやりとりは、インタビューする者(IR)とそれに対し答える者(IE)の二者間で成立することは1節で述べた。しかし、Mはこのどちらでもない立場に位置していた。そこで、2節で述べたように、1~3行目のK-Zのやりとり中において、Mは「聞き手性」を表示し、KとZによるやりとりを聞いた後、Kが話そうとしていない事を視線や沈黙によって確認し、Kに代わってZに質問することができたのではないか。その時にMは、自らをKの「質問補助者」とカテゴリー化し、IRであるKに代わってZに質問することでインタビューの枠組み⁶に参加することが可能になったと考えられる。

⁶ E.ゴッフマン(Goffman 1974,1981)はその場に居合わせている(話し手以外の)人々は、そのつど発話に対して様々な水準の受け手として関係しており、そのつど発話に対す

また、この場面はインタビューを開始して間もなく(およそ1分後)ということもあり、IRであるKの「お助け船」としてKに対しフォローした可能性もある。Kはインタビューすることにまだ馴染めず、質問しづらい状況であった、つまり、KはIRとしての役割を果たすことが困難であったがゆえに、そのことを認識したMはKを補助する意味でIRの役割を果たしたといえる。

このときのMの発言、4行目と6行目はKに対する割り込みではなく、Mが質問することで、はじめのKの質問(1行目)である体調の如何をZからさらに深く聞きだすことになり、結果的にZは、Kの質問により明確に回答している。また、Mの発言はKの始めの質問と関連するものであり、ここで発言すべき内容に適している。Kもまた、沈黙したり、Mの質問後のZの答えに対してコメントする(10行目)ことで、Mの発言が割り込みではないことを容認していることが分かる。コメントをするということは、自らが本来のIRであり、IRとしての役割を果たす、ということマークしていることが分かる。

Mのカテゴリーは、単なる「聞き手」から、Kに代わってIRの役割(Zに対し質問する)を果たす「お助け船」と変化しており、そのことでIRであるKを手助けし、また、IEであるZの答えをさらに詳しく導き出す役割を果たしたといえる。

3-2. 質問補助者

次に断片3の会話を見てもらいたい。ここでは、Zが「病気にならなければお金を使う必要もない」と言ったことに対し、Kが『お金を使う機会はあるのか』と話題をもちかけた場面である。ここでも、断片2と同様、Mによる発話がされているがここでは断片2とは異なって、Kが最初にもちかけた話題とは少し内容のずれた発話になっている。

【断片3】PM2:09:28~(トランスクリプト185ページ164~174部分)

- 1 K: お金使う機会ってあります? 質問
- 2 Z: 今は食事だけのこと 回答
- 3 K: それ以外には? 質問
- 4 Z: ない、はい 回答
- 5 K: そうですか コメント
- 6 Z: もう洋服買おうという気、気もないし 回答
- 7 K: ふーん コメント
- 8 (7.0) 沈黙
- 9 M: Zさんご飯は自分で作りよんけ?
- 10 Z: はい、
- 11 M: 全部作りよん
- 12 Z: 作りよん

る受け手の布置のことを「参与の枠組み」と呼んだ。

Mは話し始めることができたのか、また、Zも答えることが可能になったのか。その時、Mはどのように振舞っているのだろうか。

Mの視線を見てみると、2 - 2で述べたのと同様、1～7行目でのKとZによるやり中では、Kが質問する時にはKに、Zが答えている時にはZに視線を向ける、というようにK - Z間で視線を移動させている。そして、8行目の沈黙の時には、次はKが質問するであろうと予測して、Kの方に視線を向けていた(視線つきトランスクリプト参照)。ここで、Kがカメラに映っていないためKの様子が伺えないが、Kが沈黙し、話そうとしていないことをMは認識することで、9行目においてZに質問する形で発話権を得ることができたと考えられる。

この時、Mは、「Zさん、ご飯は自分で作りよんけ?」と、話し始めに「Zさん」と明示的にZを名指しすることで、この場面ではZがIEであること、Zが答えるべきであることを認識し、この発言は『Zに向けた質問である』とマークすることが可能となった。また、Zも、自分の名前を直接呼びかけられることで、Mによる発話が自分に対する「質問」だと認識でき、10行目において答えることが可能となった。サックス(Sacks et al.1974/1978)は、会話のなかには話す順番を配分する規則が働いているという。その場合、「もし今の話し手が、呼びかけや質問等により次の話し手を選択したならば、その選択された者は次に順番を取って発言する権利を得、かつその義務を負う」と言っているが、断片3においても、Mは呼びかけによって次の話者Zを選択し、またそのことで、選択されたZは答えることが可能になったというわけである。

Mは7秒間の沈黙が属するKを気遣い、手助けする形でKに代わって自らを「IR」とカテゴリー化し、IEであるZに質問したものと考えられるのではないか。また、7秒間の沈黙でインタビューが中断しそうになったが、このMの発言によって中断を防ぐことが可能となった。そして、MとZによる「IR」 - 「IE」対(9～16行)の後、本来のIRであるKが、再びMからIRの立場をバトンタッチし、17行目でZに対して質問をし始める。

3 - 3 わかったこと

断片2, 3では本来『質問する』というIRの役割をKに代わってMが果たしていた。その際には、Kがインタビュー開始直後で戸惑っていること、7秒間の沈黙がKに属していることを認識し、Kを手助けする形で「IRの補助」として振舞ったものと考えられる。このMの発言は、Zの答えをさらに詳しく導きだす働き、インタビューが中断することを防ぐ働きをしたといえる。また、Mは、KとZがそれぞれ「IR」「IE」であることを認識し、Kに直接答えるのではなく、Zに質問することで、それぞれの立場を争奪しないよう配慮しつつ、振る舞っていることが分かった。

4、Zの補助としてのM

4 - 1 話題の展開

この場面は、普段の過ごし方をIRであるKが質問し、IEのZが答えているところである。ちなみにMは、『Zが日記を書く』という行い以外にも『経文を書写する(写経)』ということを知っている。

【断片4】PM2:01:47~(トランスクリプト181ページ21～33部分)

- 01 K: 日頃は何をされて
- 02 Z: もうこのごろ言うたらもう何もありません。ただポーっとしてこんなとこに座ってこんな日記書いたり、いろいろしているだけです
- 03 K: ふーん

- 04 Z：はい
 05 M：お経書くんがあるよな
 06 Z：はい、写経 [してます
 07 M： [写経しよんな
 08 K：シャキョウ、え、あっ
 09 M：うん、えと、お経写すんな
 10 Z：はい
 11 K：は一、えっ、それはいつごろからやられてるんですか？
 12 Z：そう、も一、4、5年も前から

ここでは、「日頃は何をしているのか」というKの質問（1行目）に対し、Zが「日記を書いている」というようにKへ回答している（2行目）、つまりKとZによる「質問」-「回答」という隣接対が成立しているが、その後Mが「お経書くんがあるよな」とZへむかって発言（5行目）をする。このMの発言からは、明らかに、Mは、Zが日記を書くという行い以外にもお経を書いていることを事前知っていたことが読み取れる。では、なぜMはこの発言を持ち出したのか。

Mは、お経を書くということを知っていたのにもかかわらず、また、Z自身もお経を書く当事者であるためもちろん知っていたことであるのだが、知っていることをあえて本人に尋ねる（相手の知識を確認・照合する）ということは、ただ単にZに聞いたかったことではなく、『お経を書いている』という事実を、IRであるKを始め、周辺の人たちにアナウンスしたのではないか。またそのことで、一番最初のKの質問である『日頃の過ごし方』についての話題を展開させる働きをしたのではないだろうか。つまり、写経をしている当事者であるZが話すべきことをZに代わって持ち出すことで話題を展開させることができた。このとき、Mによる5行目の発言は、Kに対して「お経を書くくんがある」と答えてしまうのではなく、「お経を書くくんがあるよな」と、Zに確認をとるような語尾（『～あるよな』という付加疑問の形）を用いることで、最終的にはIEであるZが答えるべきだと促す働き、ZのIEという役割を争奪しないように配慮していることが分かる。

4-2. 共同で答えを達成すること

次に、断片5は『Zが給食宅配サービスを受けている』ということについての話題である。実際、給食宅配サービスの制度を受けている当事者はZであり、この話題はZによってなされたものである。

【断片5】PM2:09:46~（トランスクリプト185ページ184~200部分）

- 01 Z：あの毎日一食はあのほれ給食を持って来てくれる
 02 M：あ、ほうやな、うん
 03 K：あっえっと、どちら
 04 M：あの一ほうゆー [やつがうん、社協の方で給食宅配サービスみたい
 05 Z： [じよ、あのあれはなんじゃ
 06 M：のんがね、前もって注文しとくんな
 07 Z：はい
 08 M：この日がいるゆーて
 09 K：ふーん
 10 M：なんか置いといたら

答する権利はあるはずである。

の可能性

インタビュー場面においては、IRとIEによる{質問/回答}というカテゴリー対で成立することは何度も述べた。しかし、IR、IEのどちらでもないMにとっては発話による参与の枠組みから除外されていて、発話しない限りでは2 - 2で述べたように、KとZの二者間のインタビューやりとりを聞く「聞き手」とカテゴリー化される。そこで、Mは「聞き手」から、KとZの「仲介者」へと自らのカテゴリーを変化させることで、この場に居合わせている3人を{M=仲介者/K・Z=非仲介者}とカテゴリー化し、そうすることで自分もインタビューの参与の枠組みに参加することが可能となった。これは、3人の配置(図1参照)からもMを「仲介者」として行為しやすい環境にさせているのではないか。つまり、Mは、KにもZにも発話を向けやすい位置に座っている。

の可能性

また、ここでは給食宅配サービスを実際に受けているZは「当事者」、MとKは「第三者」{Z=当事者/K・M=第三者}とカテゴリー化することも可能であろう。この場合、答える権利は「当事者」であるZにあるはずだが、Mは高齢であるZには説明しにくいであろうと気遣って、自らが答えることでZに「助け船」をだし、Zをフォローしたということが考えられる。自分は当事者ではないが、当事者であるZは高齢であるため、自分のほうがZよりも給食宅配サービスについて詳しく答えることができる、つまりMは、自分を「第三者」から、Zの「補助回答者」または「より知っている者」とカテゴリーを変化させることで、Zに代わって答えることができた。

、の両可能性についても、この時のMの発話は一見、Zに対する割り込みのようにも見えるが、Mの視線を見てみると話し始めはKに向けられているが、6行目ではKからZに視線を変え、また、断片2と同様、『～するんな』という付加疑問の形でZに確認を得ている(視線つきトランスクリプト参照)。このことからMはKに直接答えることがないよう意識しつつ、最終的にはZが答えるように促す役目をしているように思える。Mの発話はKに対するZの返答の一部といえるだろう。つまり、Kの質問に対しMとZが共同で答えを導いている、MとZによるやりとりの中でKは給食宅配サービスについて理解していくことがKによるコメント(9行目)から分かる。上図のように【K=「質問」 M=「補助回答」 Z=「回答」】という発話シークエンスになっている。

また、その後の会話も見ていくと、Mが話した直後にZが、11・13行目において1度自らが話したこと(1行目)と同じ発話を再び繰り返す。このZによって繰り返された発話には、どのような意味があるだろうか。

給食宅配サービスについての話題を持ち出したのはZ自身であり、Kの質問に対してMが話し始めた後ではあるがZ自身もMの発話とオーバーラップして答え始めようとしている(5行目)。つまりKの質問に対し、Zにも答えようという姿勢が見られるのだが、それにもかかわらずMがさらに話しつつけるためにZは話を打ち切り、最終的にはMが説明を終えてしまう。Zから見れば発話権を奪われ、説明することができなかったことになる。Zは、Mの発話を「お節介」として受けとった可能性がある。そこで11行目において、Zは、Mの発話途中ではあるが、オーバーラップして「まい、まいにち一食な」と、再び説明するチャンスを獲得することに成功した。

「潜在的完結点以外(話しの途中)にオーバーラップが生じた時は、どちらかが話すのをやめ、相手に発話の順番を譲る。その場合、二つの発話が重なってオーバーラップした箇所の修復(リペア)がなされる」(山田[1999:10])と山田が言うように、この場面でもZは『まい』を修復して「まい、まいにちな」と言い換えていることが分かる。Zは、自分は給食宅配サービスを受けている「当事者」であり、自分も説明することが可能である

ということをマークしていると考えられる。

もう一つの点として、Zの身体の動きを見てみる。すると、Zは5行目でMとオーバーラップして発話した後、Mが話しを続けたために、自分が答えることができなくなると、後ろにそらしていた姿勢から上体を前かがみにする（下図参照）。これはMが発話すること（発話権）を認めているとも捉えられるが、Mの発話を「お節介」として受け止めた場合、自分が聞き手になるという表示（聞き手性の表示）を示すと同時に、Mの発話後に自分が説明（回答）するという表示、インタビューに参加するというモーションであるとも考えられるのではないか。



上体を後ろから前にかがめる



【画像データ2：Zの体勢変化】

4 - 3 わかったこと

断片4で、Mは、あえて知っていることをZに質問することで、本来は当事者であるZが持ち出すべき話題をZに代わってKや周囲の人々に提供し、話題を展開させる働きをしていることが分かった。また、断片5では、KのZへの質問に対し、Zが答えるべき場においてMがZに代わって答えることで、Kに対し、より正確に答えることができたといえる。その際に、両場面ともKに直接答えず、Zへ確認を含んだ質問をすることで、最終的にはZが答えるように促すよう、IEとしてのZの立場を争奪しないように配慮していることが分かる。

5 . 終わりに

このインタビューでは、KがIR、ZがIEの役割で設定されていて、MはZの付き添いとして同席していた。そこでMは、2節で分析したように、ただKとZによるインタビュー

やりとりを聞く、「聞き手」とカテゴリー化される場合のほかにも、Kの補助としてZに質問する「補助質問者」となる場合（3節）や、KのZへの質問に対してZの代理として答える「補助回答者」となる場合（4節）など場面によってMのカテゴリーは変化しており、複数の参与の仕方をしているように見える。「並行して利用可能なカテゴリー集合が複数ある場合、参与者たちは参与の連携の配置を維持したまま、カテゴリーを切り替えることも可能である」（串田 [1999: 129]）と串田秀也が言うようにこのインタビュー場面において、MはKやZと参与において連携し、ひとつの単位をなすものとして振る舞っているようにみえる。

この時、Mの発話は、KやZに代わって話題を展開させる働き、IEであり、高齢でもあるZを補助する働き、Kに対してよりスムーズな説明を確立させる働きなどを行っている。そして、MはIRとIEの両役割を兼ね、場面によってカテゴリーを切り替えることで、MとK、ZとMが共同で質問や答えを達成することが可能となった。その際には、Kに直接答えることがないように、最終的にはZが答えるようにとZに配慮していることが分かった。また、KとZによる「IR」「IE」関係を崩すことがないように、うまく維持させる働きをしているようにもみえる。

これまで見てきたように、今回のインタビューが単なるKとZによる「質問」-「答え」というカテゴリー対で成立しているのではなく、第三者のMによる様々なカテゴリーの変化によって、インタビューをよりスムーズに、より深く成立させることが可能となった。また、Mのカテゴリーの変化をKやZも理解し、何のトラブルも起こることなく共同でインタビューを達成させていることが分かった。

最後に、この論文を書くにあたり大変ご多忙の中、調査にご協力いただいたZさん、Mさんをはじめ伊勢町の方々にこの場をかりて感謝の意を表したい。また、遠方からわざわざお越し頂き、適切なアドバイスをして頂いた藤守さんの意見は大変参考になりました。ありがとうございました。

参考文献

- 串田 秀也 1999 「助け船とお節介」 好井 裕明・山田 富秋・西阪 仰（編）『会話分析への招待』，世界思想社：124 - 147。
- 西阪 仰 1997 「語る身体・見る身体」山崎 敬一・西阪 仰（編）『語る身体・見る身体<附論>ビデオデータの分析法』，ハーベスト社：4，18。
- 山田 富秋 1999 「会話分析を始めよう」『会話分析への招待』，世界思想社：10。
- 好井 裕明 1999 「制度的状況の会話分析」『会話分析への招待』，世界思想社：41。